

Japanese Participation in the Korean War, 1950-1953

朝鮮戦争への日本の参戦, 1950-1953

Somei KOBAYASHI

Abstract

本報告は、日本が、朝鮮戦争(1950-53年)に、どのように関わったのかについて、歴史的事実の解明と、その意味について解釈を試みるものである。ここでは、「政府としての日本」と「個人としての日本人」の二つの側面に注目して、朝鮮戦争への日本の参戦について検討する。

日本は朝鮮戦争に参戦しておらず、あくまで南北朝鮮および米中ソが加わった戦争である。当然朝鮮戦争休戦協定の締結国でもない。朝鮮戦争は、日本にとって「対岸の火事」であり、戦争で打ちひしがれた日本の経済を復興させる、絶好の機会となった。これが、日本の教科書における典型的な記述である。しかし、本当に朝鮮戦争に、日本は参戦しておらず、「対岸の火事」だったのだろうか。

最近の研究において、日本が、事実上、朝鮮戦争に「参戦」していたことは、知られ始めている。政府のレベルでの参戦として、例えば、国連軍の命令により、海上保安庁の掃海部隊が、北朝鮮・元山沖に派遣され、機雷除去任務にあたり、さらにその過程で死傷者まで発生していたことやNHKが国連軍司令部による心理戦で重要な役割を果たしていたこと。さらには、米軍の兵站基地として、主にロジスティクスの面で日本政府が支援していたことなどがあげられる。

個人としてのレベルから見れば、日本人乗組員で構成されたLSTが、国連軍捕虜収容所から台湾へ捕虜を移送したことや韓国の港湾施設で日本人が荷役作業を行っていたこと。さらに、報告者による現在までの調査では、組織や国家として直接、戦闘行為には関わっていないが、朝鮮人民軍や中国人民志願軍、そして韓国国軍の兵士として戦闘行為に加わったと推定される日本人個人の存在も、各国に散逸する一次史料や証言を通じて明らかになりつつある。

以上を踏まえ、本報告は、次の3つの課題を有している。第一に、日本は、どのように朝鮮戦争に参戦していたのか。第二に、こうした参戦は、朝鮮植民地支配や日中戦争、太平洋戦争、GHQ/SCAP占領とどのような関係を有していたのか。第三に、朝鮮戦争の参戦が、なげかける現代的意味は、いったい、いかなるものなのか。これらの課題の解明を通じて、本報告は、朝鮮戦争への日本の参戦が有する意味について考えたい。ここに本報告のもっとも大きな目的がある。